

音楽の要素への気づきを促す比喩表現の効果

—サン=サーンス《象》《堂々たる獅子王の行進》をどう鑑賞するか—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 穎川桜子

1. 本稿の課題と方法

本稿は、小学校音楽科の鑑賞活動における感想記述に比喩表現を用いることの効果とその実践について報告する。

現在の小学校学習指導要領解説音楽編（平成29年度告示）の鑑賞の目標には、曲想と音楽を形づくっている要素との関わりを理解することが示されている（pp.9,25）。その理解に関して、これまでどのように研究されているのだろうか。まず宮下（2008）は、音楽鑑賞における批評の基本構造を次のように見ている。〈A〉音楽の要素である形式的側面の知覚と曲想である内容的側面の感受→（それを根拠にして）→〈B〉自身で音楽を評価する→〈C〉評価を他者に伝える（p.147）。また、矢印は、単なる順序を示すものではなく、〈A〉〈B〉〈C〉を統合的に捉える関係であり、〈C〉言語表現が稚拙で貧弱である場合、〈A〉〈B〉も稚拙で貧弱であるとしている（p.155）。したがって宮下は、〈C〉の前にどのように〈A〉知覚・感受を保障するかを重視している。宮下は、吹奏楽部員に対してプロコフィエフの《トッカータニ短調作品11》での音楽鑑賞を実施し、〈A〉知覚・感受したことを、〈B〉生徒自身で評価して〈C〉発話できるかどうかを分析している。このように、曲想と音楽の要素の関係が、授業の直接的なねらいにはなっていないながらも取り上げられている。

この点に着目して鑑賞教育に取り組んだのが高木（2014）である。高木は、宮下の研究をもとに、語彙の少ない児童は、「きれい」「すごい」といった幅の広い語（形容詞）が多用されやすい（p.18）としている。一方、比喩表現の使用には一定の言語運用能力が必要であるが、自身の経験や、想起された情景に託して自己の感情・思考

を記述したりする方が、児童にとっては比較的記述しやすい傾向が見られた（p.23）としている。高木は、芸術鑑賞会での感想記述で、「木の葉がおどっているように見えました」という曲想の記述は、音楽の「動き」を木の葉の動きに投影して認識していると考えられる（p.18）としている。このことから、比喩を用いた曲想の記述によって、音楽の要素への気づきを促す可能性があるということが示唆されている。

この比喩の役割に焦点を当てて、鑑賞の授業における比喩表現の役割について研究したのが兼平（2015）である。兼平は、音楽の授業における比喩表現は、児童が感じ取った音楽の質を他者に伝え、理解を共有したいという欲求から生まれる表現である（p.54）としている。教師は児童がつぶやく比喩表現で表した形式的側面（音楽の要素）を適切に捉え、それが顕著に浮かび上がるような方法で、音にかえしたり、全体に共有したりすることで、知覚・感受の深まりが期待できる（pp.59,60）としている。

この兼平の研究を踏まえて、本稿では、「何気なくつぶやいた比喩的表現」（兼平 2015, p.59）ではなく、教師が比喩表現による感想記述を促し、さらにその比喩の理由を問うことによって、曲想と音楽の要素の関係の理解に取り組んだ。比喩表現を手がかりに理由を言語化することによって、児童は、自身が感じた印象と音楽を形づくっている要素とを結び付けて捉えることができるのではないかと考えた。

2. 授業内容とワークシート（WS）

本授業は、県内の小学校3年生35名を対象に行なった。教材は、サン=サーンス作曲の「動物の謝肉祭」より、「小学生の音楽3」（教育芸術社）の鑑賞曲となっており、原曲と異なるチューバ

で演奏されている《象》と、「小学生の音楽4」（教育芸術社）の参考音源となっている《堂々たる獅子王の行進》を扱った。本稿では1時間目《象》の授業について報告する。

授業内容は、以下の表1の問題で構成されている。問題1.2.3.9ではワークシート（WS）の記入を求めた。WSの内容は表2である。WS③の□□□には、「みたい」という言葉を児童に記入させてから取り組んだ。

表1：授業内容

【問題1】《象》を聴いて初発の感想を書く（WS①）。
【問題2】曲名が動物であることを提示し、再度曲を聴き感想を書く（WS②）。
【問題3】比喩表現を指定し、再度曲を聴き感想を書く（WS③）。
【問題4】曲が表している動物が「カメ」や「ナマケモノ」ではない理由を考える。
【問題5】【問題3】で例えた動物が、具体的にどんな行動を何匹でしているか考える。
【問題6】曲全体ではなく、曲の変化に気づくよう、三部形式のそれぞれの場面の動物の行動を考える。
【問題7】サン=サーンスがつけた曲名を知る。 教科書の4つの楽器のうち、低い音が出そうな楽器がどれか考える。
【問題8】チューバが高い音だった場合の動物の様子を考え、低い音によって象の様子を表していたことに気づく。
【問題9】授業後に再度曲を聴き感想を書く（WS④）。 授業を通しての感想を書く（WS⑤）。

表2：ワークシート

①曲をきいた感想を書いてください。
②曲をきいた感想を書いてください。
③曲をきいた感想を〔～□□□。なぜなら～だから〕という文章で書いてください。
④曲をきいた感想を書いてください。
⑤今日の授業で1番頭にのこったことを書いてください。

問題1・2は以下の想定のもとに構成されている。問題1は、形容詞による感想があがるのではないかと。問題2は、動物が曲名であることを提示するため、形容詞に加えて動物の名前があがるのではないかと。問題3～8は次の意図のもとに構成されている。問題3は、比喩表現の指定によって、根拠となる音楽の要素にも着目でき

るのではないかと。問題4は、《象》の曲想には合わない動物をあげることで、曲の要素により着目できるのではないかと。問題5は、動物の具体的な様子の想像を促すことで、気づけていなかった、言語化できていなかった要素にも着目できるのではないかと。問題6は、曲調の変化にあわせて曲を区切り、それぞれの場面での動物の行動を想像させることで、3部形式に着目できるのではないかと。問題7で曲名と演奏楽器を知り、問題8は、チューバの低い音色に着目し、もし高い音だった場合のどんな動物になるか想像させたとき、「イヌ」や「ネコ」など小さい動物があがるのではないかと。最後に問題9では、再度曲を聴いた感想と、授業の感想を促す。

3. 授業記録とその考察

ここでは、表1に示した授業内容について、問題ごとに授業記録を提示し、曲想と音楽の要素との結びつきに焦点を当てて考察する。この焦点は、特に問題3～6の考察において意識されている。授業記録は、ビデオカメラ使用の許可をいただき、その映像を文字に起こした。

3-1. 問題1の授業記録の考察

まず問題1の授業記録が表3である。授業記録において児童の発言の曲想には点下線、音楽の要素には実下線を引いている。

表3：問題1の授業記録

【問題1】《象》を聴いて初発の感想を書く。
T：【発問1-1】今から音楽を流すので、みんなワークシートの①の曲を聴いた感想を書いて下さい下さいっていうところ、そこにまず曲を聴いた感想を書いて下さい。じゃあ流します（組曲「動物の謝肉祭」の《象》（0:00～）流す）。
T：もう一回だけ流します（再度流す）。
C：（《象》を聞きながらWSに感想を書いている）
C：チューバ？（《象》で使われている楽器を発言）
C17：チューバではないんじゃない？
C30：トロンボーンかな。なんか伸ばしている感じが
C17：トロンボーンではないと思う。チューバ？
T：【発問1-2】じゃあ、何人か今書いた感想を教えてください。んだけれど、教えてください。
C：いろいろな楽器が使われていた。（C33）音が低い。（C17）
C32：えっとー。低い音で、なんか、ちよつと耳に残る。

問題1では、曲を聴いた初発の感想を尋ねた。発問 1-1 での児童の反応の予想としては、「重たい」「どっしり」「大きい」「のんびり」など形容詞が挙がると想定していた。そのため、C17・30が「チューバ?」「トロンボーン?」といきなり楽器の予想を始めたことは想定外であった(C17・30:吹奏楽経験者や習い事でピアノをしている児童)。次の発問 1-2 ではC17・32は、「音が低い」「低い音」と発言した。この曲は楽器の音色に特徴があるので、曲の雰囲気よりも先に、「音の低さ」に児童の視点が向いたのではないかと考えられる。

3-2. 問題 2 の授業記録の考察

次に問題 2 の授業記録が表 4 である。

表 4：問題 2 の授業記録

<p>【問題 2】 曲名が動物であることを提示し、再度曲を聴き感想を書く。</p> <p>T: 実はね、この曲、動物がタイトルになっている曲なんです。</p> <p>C: ゾウ! (C) ナマケモノっぽかった気もする (C13)</p> <p>T: 【発問 2-1】 もう一回流すので、今度② (WS②) に 2 回目の感想を書いて下さい。では流します。(組曲「動物の謝肉祭」の《象》(0:00~) 流す)</p> <p>C: 《象》を聞きながら WS に感想を書いている</p> <p>T: 【発問 2-2】 じゃあ 2 回目の感想を教えてください。</p> <p>C8: ゾウ!</p> <p>C10: ゾウみたいだった!</p> <p>C: のっそりした感じ (C13) ぶうーんぶうーんが (C10)</p> <p>C5: ナマケモノみたいだった</p> <p>C12: なんかー音ー音重い</p> <p>C10: ゾウみたいだった。</p>
--

問題 2 では、動物がタイトルになっていることを提示したため、児童の回答の変化が見られ、音色への着目から、「ゾウ」「ナマケモノ」といった具体的な動物があがった。印象的なのは、C8の「ゾウ」という発言に対して、C31が「のっそりした感じ」C10「ぶうーんぶうーんが」と発言する場面である。これは、C8が提示したイメージに対し、周囲の児童がそのイメージに共感し、さらに自分の感じた根拠を付け加える形で発言していると考えられる。比喻を用いることで、イメージを共有しやすくなったのではないか。一

方で、直接的に音楽の要素へ触れる発言は、ここではあがらなかった。

3-3. 問題 3 の授業記録の考察

問題 3 では【発問 3】「[~みたい。なぜなら~だから] という形式でワークシートに感じたことを記入してください」を出し、WS③に比喻を記入させる形で進めた。書き方については、「ありみたい。なぜならすごく小さい音だったから」「カラスみたい。なぜなら、カラスの鳴き声に似た音だったから」と例を出して説明した。その後の授業記録が表 5 である。なお、表 5 の仕切り線は中略を意味し、それは表 5 以降の授業記録でも同様である。

表 5：問題 3 の授業記録

<p>【問題 3】 比喻表現を指定し、再度曲を聴き感想を書く。</p> <p>C?: ゾウが行進しているみたいみたいな?</p> <p>C28: ゾウの鳴き声みたい。</p> <p>C あ~</p> <p>T: (黒板:ゾウの写真 (田中,1996,p.24) 掲示)</p> <p>C28: なぜなら低い音がゾウの鳴き声みたいだから。</p> <p>C: あ~</p> <p>C34: カエルが跳ねてるみたい。</p> <p>T: カエルが跳ねてるみたい。理由、なぜなら、</p> <p>C34: 音が跳ねてるから。</p> <p>C25: 巨大動物が行進しているみたい。低くて力強い音が足音みたいだったから</p> <p>C31: ゾウが行進しているみたい。落ち着いた音だからゾウみたいだと思ったし、ゾウの強い足踏みみたいな音だったから。</p> <p>C8: カバみたい。</p> <p>T: カバみたい。理由は?</p> <p>C8: なんかなめらかだし、低い音だから、あくびしてるみたい。</p> <p>T: カバみたい (黒板:カバの写真 (田中,1996,p.29) 掲示)</p> <p>C10: えーとイノシシみたい。</p> <p>C12: あ~。</p> <p>C10: えーあの一デカイ、あの一低いドーンドーンが何だっけつつこむ様子みたいだった。</p> <p>T: 先生も考えたの。何っばいか。先生は、クマっばいなど (黒板:クマの写真 (坂井,2008,p.7) 掲示)</p> <p>C: あ~</p> <p>C10: 力強くて低い音。</p>
--

児童（C8,10,25,28,31,34）の発言を見ると、
 比喩で表した印象と、理由部分の音楽の要素を
 対応させて鑑賞できていることがわかる。初め
 て形式を指定した問題から、比喩表現を用いる
 ことによって、音楽の要素をより意識的に捉え
 ることができるようになるのではないかという
 本稿の仮説の妥当性が示されている。

それに合わせて、問題 2 の発問 2（表 4）
 では、「ゾウ」「ナマケモノ」といった単語を述べる
 だけだったが、問題 3 の発問 3 で比喩を指定し
 た際は、「ゾウの鳴き声」や「カエルが跳ねてい
 る」「巨大動物が行進している」のように、行動
 や動作を付け加えて、詳しく説明している。

3-4. 問題 4 の授業記録の考察

問題 3 で、児童から「ゾウ」「カバ」「イノシ
 シ」などのゆったりと歩く大きい動物が出てく
 るという予想から、問題 4 では、「カメ」や「ナ
 マケモノ」のような、ゆっくりだけど大きくはな
 い動物を提示することで、「大きい」と感じた根
 拠となる要素が、児童たちの中でより明確にな
 るのではないかという点をねらいとした。問題 4
 の授業記録が表 6 ある。

表 6：問題 4 の授業記録

<p>【問題 4】曲が表している動物が「カメ」や「ナマケモノ」 ではない理由を考える。</p> <p>T：じゃあ、今、色んな意見が出て、ここは大きい動物が ちょっと多かったんだけど、</p> <p>【発問 4-1】じゃあカメみたいには感じなかった？</p> <p>C：あ～</p> <p>C31：<u>のっそり</u>した</p> <p>C12：あ～</p> <p>C31：<u>のっそりゆっくり</u>。</p> <p>T：でもさカメって出なかったよね？カメっぽくなかった 理由は？</p> <p>C：<u>大きな音</u>だったから（C14）、<u>力強く</u>（C31）</p> <p>T：うんうん。カメよりも、じゃあ今の曲は、大きい動物っ ぽいになってみんな思った？</p> <p>C12：うん。なんか、<u>重い感じ</u>。</p> <p>T：【発問 4-2】じゃあさ、さっきちょっと聞こえたんだ けどさ、ナマケモノは？</p> <p>C10：ナマケモノは、</p> <p>C1：<u>ぼー</u>って音が伸ばしてたから</p> <p>C10：<u>のんびり</u>。</p>
--

<p>C14：テンポがゆっくりだから、</p> <p>T：テンポがゆっくりなところがナマケモノっぽい？</p> <p>C14：[頷く]</p> <p>T：じゃあここでさ、低い音とか力強い音っていうところ が、ナマケモノっぽい？ぽくない？</p> <p>C1：でも<u>力強いのはナマケモノっぽくない</u>。</p> <p>C5：でも低い音は、</p> <p>C1：<u>低い音はナマケモノっぽい</u>。</p> <p>T：じゃあ、ちょっとこの曲とは、ぴったりは合わないかな ってみんな思ったのかな？</p> <p>C：うーん</p> <p>T：もっと大きい動物っぽいと思った人が多かった？</p> <p>C：……。</p>

発問 4-1 のカメに対しては、「のっそり」「ゆ
 っくり」と言う点が一致していた一方で、
 「力強く大きな音」と言う点が異なっていると
 言う発言が出た。これは、児童が「ゆっくり」と
 いう『速度』と、「大きい」「力強い」という『音
 色』を区別し、複数の音楽の要素を捉えることが
 できていることがわかる。

発問 4-2 のナマケモノに対しては、発問 2 で
 C5「ナマケモノっぽい」という発言もあったた
 め、判断が分かれることも想定された。最終的に
 は決めきれない様子であったが、児童の意見は、
 「のんびり」「ゆっくり」「低い音」はナマケモノ
 らしい要素であるが、「力強い」ところがイメー
 ジと一致しないというものであった。

児童は、比喩をただ挙げるのではなく、他の動
 物と比較することで、より細かく音楽の要素を
 分析する姿勢が見られた。そして、問題 3（表 5）
 で理由として挙げ要素はそれぞれ 1 種類ずつ
 であったが、発問 4 では児童がいくつかの要素
 に着目して考えることができていると見とれる。
 つまり、より多くの音楽の要素を根拠に印象の
 正誤を検討できていることがわかる。

3-5. 問題 5 の授業記録の考察

問題 5 では、問題 3（表 5）で例えた動物が、
 具体的にどんな行動を何匹でしているか考える
 ことで、初めは気づかなかった、また言語化でき
 ていなかった音楽の要素へ着目できるのではな
 いかという点をねらいとした発問である。授業
 記録が表 7 である。

表 7：問題5の授業記録

<p>【問題5】【問題3】で例えた動物が、具体的にどんな行動を何匹でしているか考える。</p> <p>T：【発問5-1】 その大きい動物たちは、何をしている？ C：行進している (C25) (C10) 歩いている (C13) C10：なんかくりかえしになってる C25：あ〜くりかえしがちょっとあった。ピアノとか C28：ないてる？ C28：すごい低い音が聞こえて、すごいないてる感じ C1：パオーンとかガオーとか C：歩いている (C21) 行進 (C13) C10：同じ同じ C10：ぶつかってる T：ぶつかってる？ C10：[頭をぶつける動作] T：あ〜 C5：あ、察進してる C25：イノシシとか？ T：【発問5-2】 じゃあ、その大きい動物は、何匹でいる？ C：え1匹 (C12)、いっぱいいると思う (C10) 10はいかないかなあ (C23) 5匹くらい (C17) C10：あ〜そうそう Cもっと思ってる (C25) 7匹くらい？ (C10) C：1匹ではないから、4匹くらい？ (C31) 7匹 (C5) T：さっきさ、1匹じゃない？って声聞こえたんだけど、1匹ってさっき呟いた人 C10：それもあるかもしれない C32：いっぱい歩いているように聞こえなかった。 T：じゃあさ、C32さんと同じで、1匹に聞こえたって人 C：[3人挙手] T：じゃあ、さっき3匹 5匹 7匹って出たけど、もっといっぱいいるように聞こえた人 C：[8人挙手] T：じゃあこれはちょっと意見が割れた？ C10：1匹だと思う</p>

発問 5-1 では動物の行動についての問いを出した。ここでは、「行進している」「歩いている」という回答が最も多く、その理由として、C10とC25は「くりかえしになっている」と述べた。これは、メロディーが反復されていると言う『構成』に着目した発言である。あわせて、C28の「鳴いている」という発言は、「低い音」が理由として上がり、『音色』に着目したことがわかる。ここでは、理由の問い返しを行わなかったことが課題であるが、多くの児童から根拠が自発的に述べられた。問い返しを行っていた場合、より多くの児童が着目した音楽の要素を、言語化

できていた可能性があったため、この点が2時間目への課題となった。

発問 5-2 では、動物が何匹でいるのかと言う問いを出した。ここでは、「チューバのソロの曲である」と言う点から1匹と答える児童と、「大きい感じ」や「ピアノの伴奏」からたくさんと答える児童で意見が割れることが想定された。実際にも意見が割れる場面であったが、ここでも理由の問い返しを行わなかったため、なぜ1匹と聞こえたのか、なぜ複数と聞こえたのかといった根拠がわからなかった。

3-6. 問題6の授業記録の考察

問題6では、三部形式の曲であることに着目できるよう、曲を区切り、それぞれの部分で動物がどんな行動をしているのかを考えさせた。まず、この曲が問題5(表7)であがった「歩いている」「行進している」様子が最後まで続いている曲であるかと尋ねると、「休んでいる」といった意見があがった。その後の授業記録が表8である。ここでは、曲調が変わる部分をB、初めの旋律に戻った部分をAとしている。

表 8：問題6の授業記録

<p>【問題6】 曲全体ではなく、曲の変化に気づくよう、三部形式のそれぞれの場面の動物の行動を考える。</p> <p>T：【発問6-2】 もう一回最初から曲を流してみるの、もしも、曲の感じが変わって、ここ行進している感じじゃないな、歩いてないなみたいところが登場したら、ストップって言ってもらってもいい？ C：はい T：(組曲「動物の謝肉祭」の《象》(0:00~)を流す) C：ストップ！ T：[0:36で一時停止] C：なめらかになった (C10) リズムが変わった (C25) 音が長くなった (C32) メロディーが変わった (C?) T：今みんなが言ったところは、 (組曲「動物の謝肉祭」の《象》(0:36~0:50)を流す) T：ここから変わったかな？ C10：そうです！ T：【発問6-3】 じゃあさ、さっきは、行進している、歩いているってあったけど、みんなが止めてくれたここからは、何してそう？ C：歩き始めた (C17) 休んでる (C16) 休んだ (C32) 小休憩 (C25) 休んでご飯食べてる (C5) ご飯! (C12) C22：うーんなんかさあ、休憩してる</p>
--

C10: えーとないてる。
C32: 俺それも違う。なんかあの歩いてる向きを変えた
C: あ〜
C13: だから、歩いてる場所とかを変えたんじゃない？ 真夏の中とか
C12: 方向を北から西に変えた
C25: なんかさ、草の上を砂の上に変えた
T: 【発問 6-5】 じゃあ、さっきの、みんながストップって 言ってくれたここからもう一回流すから、またもし、曲の 感じが変わったら、またストップって言ってほしいんだ けどいいですか？
C: はーい
T: じゃあいきます。 (組曲「動物の謝肉祭」の《象》(0:36-)を流す)
C: ストップ!
T: (0:50で一時停止)
T: じゃあ、今止めてくれた、 (組曲「動物の謝肉祭」の《象》(0:50~1:00)を流す) この辺がさっきと雰囲気が違う？
C: ピアノがなんか(C25) うん。また違う(C10)
C32: 違うそこじゃないわ。
T: じゃあさ、今みんなが止めてくれたところからはさ、 (組曲「動物の謝肉祭」の《象》(1:00~1:10)を流す)
T: 【発問 6-6】 今のここの休み終わったところから、どう なってる？
C34: 走り始めた
C35: えっと、走り始めたの反対なんだけど、歩き始めた。
C2: えっと一大きい音
C10: 大きい音になったから、もしかしたら、休んで元気 になったからはしゃいでる。

まず、B (0:36~0:50) 特徴として、一つ目はチューバの旋律が変化し、これまでのスタッカートのある旋律から、音価の長いレガートな旋律に変わる点が挙げられる。二つ目は、ピアノ伴奏が、三拍子を刻む形から、音の数が少なく、強弱も弱く変化した点である。発問 6-3 では、児童の多くが 0:36 から変化することに気づいた。曲を止めた際、C10「なめらかになった」、C25「リズムが変わった」、C32「音が長くなった」、C?「メロディーが変わった」など、いずれも『旋律』に着目した理由が自発的に出た。そして、発問 6-4 では、曲の全体を扱った発問 5-1 (表 7) では見られなかった「休んでいる」という回答が最も多く出た。それ以外にも、C10「鳴っている」C32「向きを変えた」など、いずれもそれ以前とは異なる行動が挙がり、児童が曲調の変化を捉

えていたことがわかる。

次に、A' (0:50~) の部分である。ここでは、再び歩き始めた、行進し始めたという意見を想定していた。実際に、発問 6-8 では C35「歩き始めた」という意見が得られた。一方、C2・C10 から「大きい音になった」という発言が出たことは想定外であった。音量の変化はAとA'では変わらないものの、伴奏の形がはじめとは変化し、より華やかな印象を与えている。その部分から、音が大きくなったように感じ取れたのではないかと考えられる。ここから、AとA'の細かな変化にも着目できていることがわかる。

一方で、ここでも理由の問い返しを行わなかったため、根拠が児童から自発的に述べられた範囲にとどまったことが課題である。

3-7. 問題 7 の授業記録の考察

問題 7 では、サン=サーンス自身が付けた曲名と、演奏していた楽器の紹介を行った。曲名を発表する際、児童が「正解・不正解」という受け取り方をしてしまい、これまでの比喻表現での活動が「曲名当てゲーム」になってしまうことを危惧していた。しかし、実際にはそのような反応が見られなかった。授業を通して、児童が「自分がどのように音楽を感じたか」を、比喻を用いて丁寧に言語化してきたことにより、曲名と一致していることが重要なのではないというメッセージが十分に伝わったためだと考えられる。その後の授業記録が表 9 である。

表 9: 問題 7 の授業記録

【問題 7】 サン=サーンスがつけた曲名を知る。 教科書の 4 つの楽器のうち、低い音が出そうな楽器がどれか考える。
T: 【発問 7-1】 この低い音ってどんな楽器だと思う？ C: チューバ!、トロンボーン
T: 【発問 7-2】 じゃあ、大きさは？ C13: でかい T: 大きさは大きい楽器だと思う人 C: (約 16 人挙手)
T: じゃあ小さい楽器だと思った人 C: (0 人挙手)
T: そしたら教科書『小学生の音楽 3』.教育芸術社) の 54・55 頁を開いてください。

T: 【発問 7-4】 じゃあ、ここに楽器が4つあるので、今から、先生一つずつ楽器の名前を言うから、この楽器かなと思うところで手を挙げてください。いいですか？じゃあまず、一番左のホルンだと思う人
C: (1人挙手)
T: じゃあトランペットだと思う人
C: (0人挙手)
T: じゃあトロンボーンだと思う人
C: (1人挙手)
T: チューバだと思う人
C: (大多数が挙手)
T: この曲は、今一番手挙げてくれた人が多かったチューバって言う楽器で演奏されていました。

演奏楽器に関しては、これまで児童から繰り返し出ていた「低い音」という要素と、実際のチューバの姿を結びつけることをねらいとした。発問1(表1)の時点でチューバという発言があったためなのか、発問7-4ではほとんどの児童がチューバであると予想した。

3-8. 問題8の授業記録の考察

次に問題8の授業記録が表10である。

表10: 問題8の授業記録

【問題8】 チューバの音色に着目する。
T: じゃあ、もしも、このチューバさ、この曲は低い音だったけど、【発問8】もしもチューバがすごい高い音だったらさ、この曲はどんな動物の様子になるかな？
C: ちっちゃい (C12) ネコとか (C13) ウサギ (C16)
C17: すばしっこい
T: いいよ。じゃあ手挙げて。
C: リス (C2) ウサギ (C1) ライオン (C17) ネコ (C13)
C12: なんかも足が速い動物
C: チーターとか？ (C23) イヌ (C8)
T: イヌ？じゃあみんなゾウとかよりももっと
C10: ちっちゃい
T: 大きさは？
C: 小さい
T: さっき誰が言ってたっけ。早く走れそう？
C14: チーターとか？
T: ゾウとかよりも、
C17: チーターとか猫科の動物とか
T: 速く走れそう？
C17: 猫科の動物とか
C12: チーターでしょ

問題8では、この曲の一番の特徴であるチュ

ーバの「低い音色」に着目し、あえて「チューバが高い音色だったら」という問いを投げかけた。ここでは、実際に音を流すことができないため、児童が想像できるかを危惧していたが、児童の意見から自分の中で高い音を想像して回答できていることがわかる。児童の回答は、ゾウなどの「大きくてゆっくりと歩く動物」ではなく、ネコやリス、ウサギなどの「小さくてすばしっこい動物」や、チーターなどの「足の速い動物」が多く挙げられた。これは、児童が音の高さを「身体の太さ」や「動きの速度」と対応づけて捉えたことが推測される。この後、問題9で再度曲を聴いた感想をWS④に、授業感想をWS⑤に記入し《象》の授業を終えた。

4. ワークシートの考察

WSは、問題1「初発の感想を書く(WS①)」と問題3「比喻表現を指定して、再度曲を聴き感想を書く(WS③)」、問題9「授業後に再度曲を聴き感想を書く(WS④)、授業を通しての感想を書く(WS⑤)」を考察した。

今回は、児童の記述を見て、印象と音楽の要素が結びついている回答を○、印象や要素が単独で述べられているものを△と評価した。実際の回答を例としてあげると、WS①で見られたC2「たのしい」、C8「くりかえしが多い」は△としており、WS③でみられたC2「ゾウみたい なぜなら大きい音だから」C8「かばみたい なぜならかばがあくびをしてる音みたいだから」は○としている。WS④とWS⑤はどちらかに結びつきがみられた場合は○としている。このように評価した結果が表11である。

表11: ワークシートの分析

	①	③	④		①	③	④		①	③	④
			⑤				⑤				⑤
1	△	○	○	13	△	○	△	25	○	○	△
2	△	○	△	14	△	○	△	26	○	○	△
3	△	○	△	15	○	△	△	27			△
4	△	○	△	16	△	○	○	28	△	○	△
5	△	○	△	17	△	○	△	29	△	○	△

6	△	○	△	18	△	○	△	30	△	○	△
7	△	○	△	19	△	○	△	31	△	○	△
8	△	○	△	20	△	○	△	32	△	○	△
9	△	○	△	21	△	○	△	33	△	○	△
10	△	○	△	22	△	△	△	34	△	○	△
11	△	○	△	23	△	○	△	35	△	○	△
12	△	○	○	24	△	○	△				

WS①では、印象や音楽の要素をそれぞれ単独で述べる児童が多数であった。一方、WS③では、先ほどの例に示したように、多くの児童が比喩で表した印象の理由を音楽の要素を挙げて説明しており、両者が結びついた回答が多く見られた。しかし、WS④・⑤を見ると、ほとんどの児童が△となっている。このことから、WS③で教師が比喩表現とその理由の回答を促した場合は、曲想と音楽の要素の結びつきが見られるものの、WS④⑤の結果から、児童自身からの回答で曲想と音楽の要素の結びつきを引き出すことは難しかったと考えられる。また、WS③において、C22「なまけものみたい。なぜならおっとりゆっくりしているかんじでなまけものがゆっくり木の上を一步、一步とすすんでいるかんじがしたから」という記述があった。このように、比喩表現を指定したことにより、音楽の要素から離れて、比喩で表した想像を膨らませていく方に意識が向いてしまう児童もみられることがわかった。

5. 本研究の成果と課題

以上本稿では、小学校音楽科における比喩表現を用いた感想記述の実践について報告してきた。授業記録およびWSの分析から、比喩表現を指定した感想記述を行うことで、多くの児童が、音楽を感じ取った印象と音楽の要素に基づいて記述している様子が見られた。問題4から問題6の過程においても、教師が明示的に求めなくても、比喩表現で表した理由を音楽の要素に基づいて説明する自発的な発言が複数あがった。これらのことから、比喩表現を用いることで、児童は音楽を聴いて生じた印象を手がかりとして、その印象を生み出している音楽の要素とを

往復しながら捉える思考を促されていた可能性が示唆される。

しかし、WS③の記述から、比喩そのものの表現に意識が向いてしまう児童もみられた。加えて、2時間目の授業では、より多くの児童の発言からこの課題がみられた。C21「ネコみたい。なぜなら、ネコがネズミを追いかけているみたいだから」C25「狩りといえば2.3匹だから2.3匹」など、音楽の要素への着目から離れて、比喩で表した想像を広げる発言が複数あがった。これは、比喩表現の指定は常に有効に機能するとは限らないというよりも、その方向に児童の発言が向かう可能性を私たち教師は意識して比喩活動を行う必要性を教えている。そしてそれは、児童の実態や授業の段階、扱う楽曲の特性などが要因となっていると思われる。今後は、比喩表現を指定することが、印象と音楽を形づくっている要素との結びつきをさらに促進するには、教師側にどのような発問と教材がさらに求められるかを検討していくことが課題である。その際、動物の写真教材の考察と選択、動物の生態に関する学習も必要になってくるとと思われる。

<参考文献>

- 宮下俊也 (2008). 「対話型音楽鑑賞での高校生
の発話における批評の発現」『奈良教育大学紀
要』第57巻 pp.145-156.
- 高木夏奈子 (2014). 「「音楽鑑賞文」にみる児童
の「音楽の語りかた」の分析」『植草大学研究
紀要』第6巻 pp.15-25.
- 兼平 佳枝 (2015). 「鑑賞授業における意味の共
有の特性—「音楽批評文づくり」にみる比喩的
表現の機能に 着目して—」『学校音楽教育研
究』第19巻 pp.51-61.
- 文部科学省 (2018). 『小学校学習指導要領 (平
成 29 年告示) 解説 音楽編』日本文教出版
- 小原光一ほか (2024). 『小学生の音楽 3』教育芸
術社.
- 田中光常 (1996). 『(世界どうぶつ家族 5) アフ
リカ 〈1〉』岩波書店.
- 坂井宏先 (2008). 『(自然 いのち ひと 11) ヒグ
マの楽園』ポプラ社.